

常時サムソンの接待を受けてきた職業病家族対策委の代理人
パク・サンフン弁護士を糾弾する
家族対策委のパク・サンフン弁護士と
サムソン未来戦略室のチャン・チュンギ社長の文字メッセージ
(8月9日付ハンギョレ)の報道について

○ 8月9日付ハンギョレ報道

8月9日付のハンギョレ新聞は『サムソン未来戦略室の社長・チャン・チュンギが職業病家族対策委(2014年8月にパノリムの交渉団から分離してできた6家族の集り)の代理人であるパク・サンフン弁護士に、高価な公演チケットを継続的にプレゼントするなど、公演で接待をしてきた』と明らかにした。

ハンギョレ新聞が検察と特検などに確認したチャン・チュンギ前サムソングループ未来戦略室社長の文字メッセージの内容には、2016年7月、パク・サンフン弁護士がチャン・チュンギ前社長に「社長がいつも送って下さる芸術の殿堂などのチケットを確かに受け取り、文化生活を豊かにしています」。続いて「社長に関心を持って頂くおかげで、『サムソン白血病オンブズマン委員会』は予防対策のための正しい道をキチンと歩んでいます。今年から3年間の活動によって、適切な成果を出すと予想し、私も常任顧問の立場で、それなりの役割をしています」と書き込んでいる。

またパク弁護士は、職業病交渉を担当してきたサムソン未来戦略室のコミュニケーション・チーム長のイ・インヨン・サムソン電子社長、チャン・チュンギ前社長と会って、食事もしている。2015年12月にもパク弁護士は「この間に送ってくださった音楽会のチケットのおかげで、文化生活を楽しんでいます」という感謝の文字も送っていた。

○家対委の代理人で、サムソンの補償委員として活動するパク・サンフン弁護士の問題点

弁護士は、担当している事件に関して、相手方から利益を受けたり、これを要求または約束してはいけない。ところが繰り返し金品を受け取ったというから問題は深刻だ。何時からどのような交流があり、何が更に行き来したのか、徹底した調査と解明が必要だ。

パク・サンフン弁護士を管理してきたチャン・チュンギ前社長は、イ・ジェヨン、チェ・ジソン、キム・チョンジュンと一緒に、サムソンでの最も重要な決定を行ってきた「未来戦略室4人衆」だ。チャン・チュンギの役割は対官業務で、各界の主要人物を管理し、最近は報道機関の幹部の広告受注で、個人的な請託まで受けていたことがマスコミの報道で知らされた。主要な人士の管理にパク・サンフン弁護士が入っていたということは大問題

だ。

パク・サンフン弁護士は2010年から2014年まで、一時、ローマサムソン半導体の白血病の労災訴訟で、被害者の代理人の中の一人として訴訟に参加した。初めて訴訟を引き受けた時とは違い、2014年の控訴審の時、パク・サンフン弁護士は事前合意した内容を無視して、突然宣告を延期して欲しいという一方的な弁論で物議をかもした。その後2014年8月に(サムソンの優先補償提案に同意して)、パノリムの交渉団から出て行った6家族の被害者が作った『家族対策委』の代理人として活動してきた。

また、パク弁護士は家族対策委を代理するとしながら、サムソンの自社補償委員会の補償委員としても活動した。当時、補償委員会の公正性と資格の是非について、パク弁護士は『家族対策委の構成員の補償審議はしない』と言って、一蹴した。今回明らかになった公演チケットなどのサムソンの接待問題についても、パク・サンフン弁護士は、特別問題はないという考えだ。このようなパク・サンフン弁護士の態度には、非常な怒りを禁じられない。同時に、サムソンの自社補償委員会の補償審議の過程に不正な事実がないのか、明らかにしなければならない。

○オンブズマン委員会は明らかにせよ

このような人物がオンブズマン委員会に関与してきたということは、また別の大きな問題だ。『オンブズマン委員会』とは、職業病予防のためにパノリムと職業病被害家族が、長い間の闘いの結果として、2016年1月にサムソンから合意を導き出した機構で、サムソンの職業病予防のために、独立性と信頼性が何より重要な機構だ。

ところが、パノリムと被害家族も知らない内に、家対委のパク・サンフン弁護士がオンブズマン委員会に常任顧問として参加し、パク・サンフン弁護士はサムソンから持続的な公演の接待を受けていたというのだから、嘆かわしい。常任顧問に参加することになった経過すら、今回初めて知らされ、『オンブズマン委員会』の透明性も問題になる。オンブズマン委員会は、パク・サンフン弁護士が常任顧問になった経過について解明し、サムソンからの独立性を維持できる対策を出すべきである。何よりも、サムソンからの独立性が要求されるこの機構に、再びパク弁護士のような人物が関与できないようにすべきである。

○サムソンは職業病被害者にキチンと謝り、排除なく補償せよ

サムソンは10年を越えて職業病の責任を回避してきた。2013年にサムソン電子とパノリムの交渉が始まったが、サムソンは『パノリムは交渉から外れる』と言ったり、交渉委員である被害者に執拗に、『優先補償してやる』と言いながら、被害者を分裂させることに集中した。

そして、2014年8月にパノリム交渉団の中の6家族が、サムソンの提案通りの優先補償要求を受け容れてパノリムから出て行き、別途の機構である家族対策委(家対委)を結成し、家族対策委は直ちにパク・サンフン弁護士を代理人に指名した。まもなくサムソンと家対委は、直接交渉でなく第三の調停委員会の仲裁(調停)を受けようと提案した。このようにして、サムソン電子と家対委の提案によって、2014年末に調停委が構成された。

しかし2015年7月、調停委が『独立的な公益法人の設立による補償と予防対策を作れ』という調停勧告案を出したが、サムソンと家対委はこれを拒否し、2015年9月にサムソンは家対委と合意したとして、自社補償委員会を一方的に発足し、被害者に対してその年12月末までに補償の申請を求めた。そして2015年10月7日に開かれた調停委の会議で、サムソンは家族対策委とともに調停委への参加中断(保留)を宣言した。この日から、パノリムはサムソン^{ソチヨ}瑞草社屋の前で野宿座り込みを始めた。そのようにして始めた野宿座り込みは、サムソンの無責任と対話回避の中で、現在678日目を迎えている。

この10年間、サムソン電子半導体・LCD工場で働き、毒性化学物質などに曝露して白血病などが発病したと情報提供してきた被害者だけ230人余り、そのうちの79人が既に亡くなった。10年間繰り返された終わりの分からない死の行列、有害化学物質の情報に関する営業秘密扱い、産業災害の認定妨害、ひたすら金と不正な管理で責任を回避しようとするサムソンの卑劣な態度は、10年目とまったく同じだ。サムソンは金品・接待などで、人間の生命と尊厳さえも踏み潰そうとする旧態から脱皮し、職業病問題について社会的な責任をまっとうする企業として、新たに出発ことを願う。サムソンは今からでも、職業病被害者にキチンとした謝罪、排除のない透明な補償を約束すべきである。

2017年8月14日

半導体労働者の健康と人権守り(パノリム)

半導体労働者の健康と人権守り (パノリム)

電話：02-3496-5067、FAX：02-6442-5065

住所：(156-827)ソウル市銅雀区舎堂洞1049-4キョンシン・ビル(南部循環路2019)5階501号

ホームページ：<http://cafe.daum.net/samsunglabor>

後援口座：国民銀行043901-04-206831(預金者：パノリム)(既存後援口座を2013年9月から上のように統合、変更しました。)* CMS 定期後援も可能です(電話で問い合わせ)